

## 都川上流付近の貝塚

千葉市の遺跡を歩く会

野呂、高田地域は、鹿島川・都川の上流域にあたります。縄文中期・後期の海岸線から10～15km 以上もさかのぼった場所です。ここに野呂山田貝塚・八反目台貝塚・誉田高田貝塚などの縄文時代の巨大な貝塚があります（図1参照）。このうち八反目台貝塚（標高40～50m）は鹿島川流域の最奥部、誉田高田貝塚（標高約50m）は都川の最奥部の貝塚です。なぜ、このような内陸部に大型貝塚があるのか、どのように縄文時代の人は暮らしていたのか、遺跡を歩きながら3000～5000年前の千葉市に思いを馳せましょう。

### 1. 野呂山田貝塚（主として縄文後期）

- 標高30～40m、遺跡が面している鹿島川後背湿地の水田との比高差は5～10m。
- 直径約80mの馬蹄形貝塚。
- 貝層を構成する貝類は、ハマグリ、キサゴ、シオフキが主。カワニナがわずかに存在。
- 獣骨としてはシカが多く、イノシシはやや少ない。タヌキ/ウサギ/ムササビ/鳥類。
- 出土土器は縄文後期のものが多いが、縄文中期/晩期の土器も少量出土している。
- 石鏃、石皿、スリ石、磨製石斧、打製石斧が出土している。
- ◆ 貝の構成が都川水系の貝塚と同様なことから、鹿島川に面した台地上にある遺跡だが東京湾で貝を採取して食べていたと考えられている。縄文人は泉公園を通過して都川に行き、舟を使った。
- ◆ 多くのシカが棲み、ムササビもいる自然が千葉市にあった。
- ◆ 木の実がたくさんとれたことが、石皿/スリ石の出土からわかる。
- ◆ 「イモ掘り」用の打製石器が出土している。

### 2. 八反目台貝塚（縄文中期・後期）

- 標高40～50m、鹿島川上流に存在する。
- 直径約100mの範囲にある点在貝塚。
- 貝類はキサゴ、ハマグリが多い。野呂山田貝塚と同様、都川を利用して海に下り貝を採取していたと考えられている。
- 打製石器、石皿、スリ石などが出土。
- 「土器塚」と呼ばれる土器破片が多量捨てられた遺構がある。
- ◆ 土器の起源の一説（参照文献：「Jomon of Japan」 by Douglas M. Kenrick、1995）
  - ✓ 土器の起源は、植物で作ったカゴに粘土を塗り、天日で乾燥させて作った容器。
  - ✓ この土製容器は木の実や穀類を保存するのに使用された。
  - ✓ 焼成により液体の貯蔵/加熱調理に使用可能な「土器」になることが発見された。
  - ✓ このような容器はシリアからイランにかけて出土。最古のものは10,600年前。
  - ✓ 乾燥気候のため原型を留めて出土。日本、中国などは湿潤気候であるため未出土。
  - ✓ 西アジアで最古の土器は9,600年前。
  - ✓ 6ヶ所で独立して土器が発生。日本(12,000年前)、西アジア(9,600年前)、中国(10,000～8,500年前)、シベリア(12,000年前の可能性有)、韓国(8,000～6,500年前)、南米(6,000年前)。

